

〈調査報告〉

歯科衛生学科 1 年次生における喫煙に関する 特別講義後における意識の変化について（第 1 報）

細見 環*, 中山 真理**, 畠中 能子*

Changes in attitudes after a special lecture of Smoking to the first-year student in the Department of Dental Hygiene (First Report)

Tamaki Hosomi, Mari Nakayama and Yoshiko Hatanaka

I はじめに

タバコ規制枠組み条約（以下、FCTC とする）の第 16 条は「未成年者への及び未成年者による販売」を規制し、未成年者へのタバコ製品の販売の禁止をうたっている¹⁾。近年、諸外国においては FCTC を順守し、禁煙法等が施行されたところも増えている²⁾。2012 年世界禁煙デーについての WHO のテーマは「Tobacco Industry Interference：たばこ産業の干渉を阻止しよう」である³⁾が、いまだ我が国においては JT はじめ諸外国のタバコ産業は FCTC の規制に反し、我が国ではタバコ広告の禁止も販売促進や後援活動の禁止もなされていない。子どもや若年者、若年女性はタバコ産業のターゲットにされ、組織的な防煙・禁煙教育が行われてこなかったこともあって、タバコ・喫煙に関する知識の乏しい彼らは非常に安易に喫煙を開始し、依存を形成してしまう⁴⁾。特に若年女性は将来母親となる可能性が高く、子どもとの対面時間の長い母親の喫煙は子どもの喫煙への影響が大きいことが分かっており⁵⁾、若年女性への喫煙防止対策の重要性が叫ばれている⁶⁾。本

学、歯科衛生学科は女子のみを対象としており、今後、医療従事者としての在りようを学んでいってもらう上で、若年女性である学生たちの入学時点でのタバコ・喫煙に対する意識がどのようなものであるかを知っておくことは非常に重要である。将来医療従事者として社会に貢献していくためにも、タバコ・喫煙についての正しい知識はぜひ身につけておいてほしい。

そこで今回、入学間もない 1 年次生にアンケート調査を行い、タバコ・喫煙に関する意識を調査し、特別講義を行った後で学生たちのタバコ・喫煙に対する認識がどう変わったかを検討したので報告する。

II 対象および方法

対象は歯科衛生学科における 2011 年度入学生とした。入学して約 1 カ月後の 2011 年 5 月に歯科衛生士概論の特別講義として『タバコ・喫煙について－ホントのはなし－』と題して喫煙防止教育を行い、その前後での喫煙に対する意識の変化等を調査した。

まず、講義の前に『タバコについての質問票（講義前）』を配布し、タバコに対する意識と喫

* 関西女子短期大学 教授

** 関西女子短期大学 講師

煙するか否か、また喫煙者には喫煙状況等の調査を行った。その後、タバコの実態やタバコに対する各国の取り組み、禁煙方法等について約 1 時間の講義を行った。

講義終了後『タバコについての質問票 (講義後)』を配布し、再度、タバコに対する意識と禁煙への関心等について調査した。さらに講義後のアンケートでは禁煙治療の導入や歯科医療従事者として禁煙支援にかかわる必要性についてなど、7 項目の自由記載による調査を行った。

遅刻して講義前のアンケートに答えられなかった学生 1 名を除くと、講義前と講義後のアンケートに共に回答した調査対象者は 104 名であった。

今回用いた『タバコについての質問票』は、加濃式社会的ニコチン依存度調査票 (Kano Test for Social Nicotine Dependence: KTSND, Version 2)⁷⁾をもとにした 11 項目の質問と、喫煙者への追加質問、その他からなり、愛知学院大学短期大学部歯科衛生学科の稲垣孝司先生により作成されたもので、許可を得て本学用に調整し使用した。

統計解析においては χ^2 検定を用いて、講義の前後におけるタバコに対する意識について有意の差 ($P < 0.01$) があるかないかを検討した。

なお、アンケートを行なうにあたっては、最初に倫理的な配慮として、アンケート結果は個人が特定されないよう配慮する事、研究結果は論文等において公表する旨口頭で述べ、同意を得た。

Ⅲ 結 果

1. 『タバコについての質問票 (講義前)』について

1) タバコに対する意識について

タバコ・喫煙等に関する以下 11 項目の意見について、自分の気持ちに一番近いものを 4 つの選択肢 (a そう思う、b ややそう思う、c あまりそう思わない、d そう思わない) から選ぶ

方式で質問を行った。

「タバコを吸うこと自体が病気である」という意見に賛成の者 (a) は 33 人で 31.7%、概ね賛成の者 (a+b) は 70 人で 67.3% であった。「喫煙には文化がある」という意見に反対の者 (d) は 34 人で 32.7%、概ね反対の者 (c+d) は 76 人で 73.1% であった。「タバコは嗜好品である」という意見に賛成の者は 16 人 (15.4%)、反対の者は 28 人 (26.9%) であった。「喫煙する生活様式も尊重されてよい」という意見には賛成の者が 3 人 (2.9%)、反対の者が 43 人 (41.3%) おり、「喫煙によって人生が豊かになる人もいる」という意見には 5 人 (4.8%) が賛成、36 人 (34.6%) が反対であった。「タバコには効用がある」という意見には 80 人 (76.9%) が反対し、「タバコにはストレスを解消する作用がある」という意見には 24 人 (23.1%) が反対した。また、「タバコは喫煙者の頭の働きを高める」という意見には 68 人 (65.4%) が反対し「医者はタバコの害を騒ぎすぎる」という意見には 52 人 (50.0%) が反対した。さらに「灰皿が置かれている場所は、喫煙できる場所である」という意見に賛成の者は 45 人 (43.3%)、反対の者は 8 人 (7.7%) であった。「医療従事者は、タバコを吸わないのがあたりまえである」という意見に賛成の者は 25 人 (24.0%) であった。

2) 喫煙について

(1) 家族・同居者の喫煙

家族・同居者の喫煙の有無については「あり」が 60 人で 57.7%、「なし」が 44 人で 42.3% であった。

(2) 本人の喫煙

「あなたはタバコを吸いますか?」という質問に対して、104 人中、毎日吸う者が 5 人 (4.8%)、ときどき吸う者が 1 人 (1.00%)、吸っていたがやめた者が 2 人 (1.9%)、試しに吸ってすぐやめた者が 5 人 (4.8%)、吸ったことがない者が 91 人 (87.5%) で、喫煙経験のある者は 13 人で 12.5% であった。

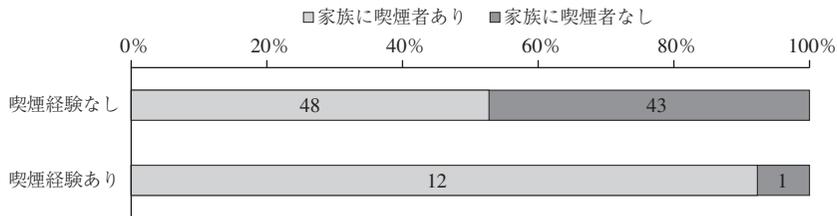


図1 周囲環境と喫煙 (n = 104)

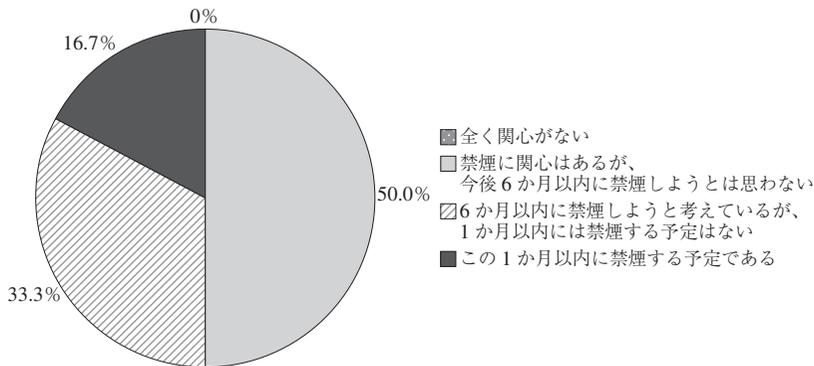


図2 喫煙者における禁煙することへの関心 (n = 6)

喫煙経験がない者では、家族・同居者の喫煙がある者が48人(52.7%)でない者が43人(47.3%)であったのに対して、喫煙経験がある者では、家族・同居者の喫煙がある者は12人(92.3%)、ない者は1人(7.7%)であった(図1)。

吸っていたがやめた者2人に対して、なぜ、いつやめたか、その際問題はなかったか等について自由記載方式で質問したところ、それぞれ「高校の時、お金かかるから」、「親にバレたし金もつたないから」という回答であった。現喫煙者6人に対して、やめようとして出来なかったのはなぜかと質問したところ、毎日吸うと回答した者3人から「周りに吸っている人がいて、やめれなかったです。イライラが増しました。」「やめたこともあったが結局ちょっとだけと思ってしまいやめれなかった。」「やめようとしている間にイライラすることがあったりで、結局やめれなかった。」という回答を得た。

さらに現喫煙者6人に禁煙に関心があるかと

質問したところ、全く関心がない者はおらず、「禁煙に関心はあるが、今後6か月以内に禁煙しようとは思わない」者が3人、「6か月以内に禁煙しようと考えているが、1か月以内には禁煙する予定はない」者が2人、「この1か月以内に禁煙する予定である」者が1人であった(図2)。

2. 『タバコについての質問票(講義後)』について

1) タバコに対する意識について

「タバコを吸うこと自体が病気である」という意見に賛成の者は59人(56.7%)、概ね賛成の者は89人(85.6%)となり、講義前の結果と比較して有意差($P < 0.01$)を認めた。「喫煙には文化がある」という意見に反対の者は47人(45.2%)、概ね反対のものは80人(76.9%)となったが、講義前の結果と比較して有意差は認められなかった。「タバコは嗜好品である」という意見に賛成の者は7人(6.7%)、反対の

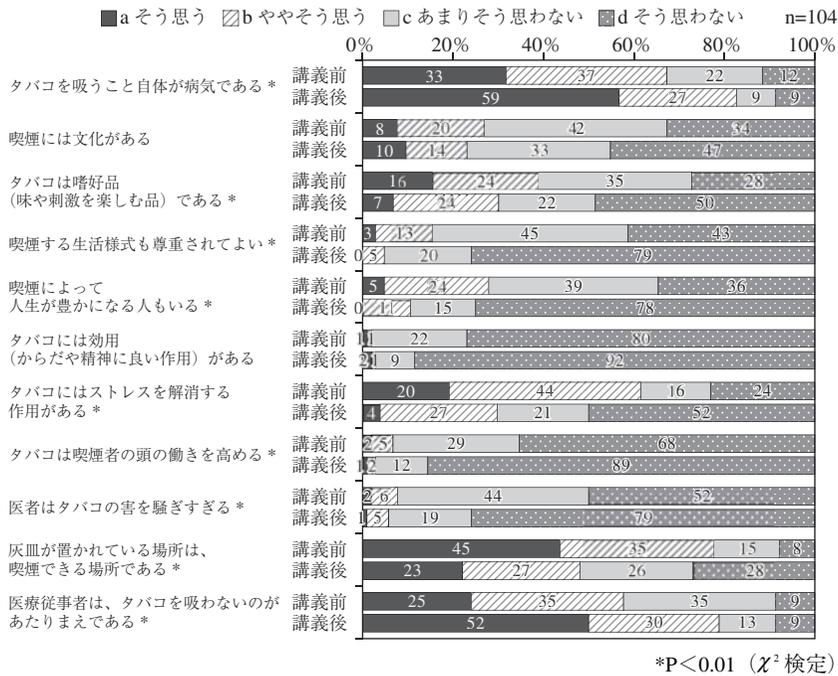


図 3 講義前・後におけるタバコ・喫煙等に対する意識の変化 (n = 104)

者は 50 人 (48.1%) となり、講義前の結果と比較して有意差 (P<0.01) を認めた。「喫煙する生活様式も尊重されてよい」という意見に賛成の者はいなくなり (0%)、反対のものが 79 人 (76.0%) となって、講義前の結果と比較して有意差 (P<0.01) を認めた。「喫煙によって人生が豊かになる人も」という意見に賛成の者もいなくなり (0%)、反対の者は 78 人 (75.0%) となって、講義前の結果と比較して有意差 (P<0.01) を認めた。「タバコには効用がある」という意見には 92 人 (88.5%) が反対したが、講義前の結果と比較して有意差は認められなかった。「タバコにはストレスを解消する作用がある」という意見には 52 人 (50.0%) が反対し、講義前の結果と比較して有意差 (P<0.01) を認めた。また、「タバコは喫煙者の頭の働きを高める」という意見には 89 人 (85.6%) が反対し、講義前の結果と比較して有意差 (P<0.01) を認めた。「医師はタバコの害を騒ぎすぎる」という意見には 79 人 (76.0%)

が反対となり、講義前の結果と比較して有意差 (P<0.01) を認めた。さらに「灰皿が置かれている場所は、喫煙できる場所である」という意見に賛成の者は 23 人 (22.1%)、反対の者は 28 人 (26.9%) で、講義前の結果と比較して有意差 (P<0.01) を認めた。「医療従事者は、タバコを吸わないのがあたりまえである」という意見に賛成の者は 52 人 (50.0%) となり、講義前の結果と比較して有意差 (P<0.01) を認めた (図 3)。

2) 今回の特別講義について

「以前に、今回と同じ内容の本を読んだり講演を聴いたりしたことがありますか」という質問に対して「ある」と回答した者が 28 人 (27.5%)、「ない」と回答した者が 64 人 (62.7%)、「どちらともいえない」と回答した者が 10 人 (9.8%) であった (図 4)。

また、講義後に再度、禁煙することに関心があるかと質問したが、結果は講義前と同じであった。

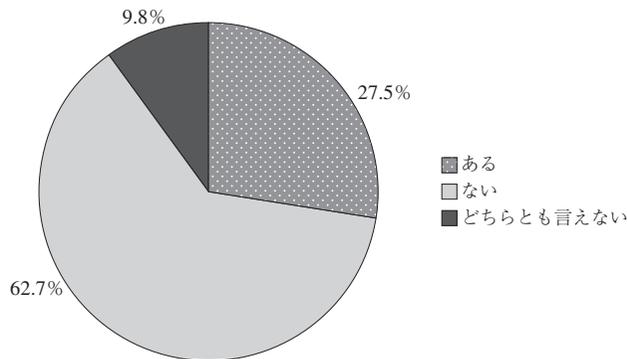


図4 今回の講義と同内容の本を読んだり講演を聞いたりした経験 (n=102)

3) 自由記載による調査(7項目)について

「タバコについてどう思いましたか?」という質問に対してはほとんどの者が「怖いものだ」、「危険なものだ」という認識であった。「覚醒剤と一緒だ」という意見もあった。

「2006年4月からの禁煙治療の導入はどう思いますか?」という質問に対しては、「良いことだと思う」、「もっと早くからすべきだった」という意見がほとんどで、「禁煙治療するくらいなら、タバコじたいを売らなければいいのに」という意見や、「外国のようにタバコのパッケージを変えたらタバコをやめる人が増えるのではないか」という意見もあった。

「今後、歯科医療従事者として禁煙支援にかかわる必要性についてどう思いますか?」という質問に対しては、「必要だと思う」という意見がほとんどであったが、「別に」と回答した者が1人いた。

「あなたのまわりのタバコにまつわる環境はいかがですか?」という質問に対しては、「家族・同居者の喫煙あり」と回答した者が60人おり、さらに「バイト先の人が吸う」「周りの友達が吸う」などという者もいた。

「自分自身、もしくは、身の回りのどんなことを改善したいですか?」という質問に対しては、非喫煙者のほとんどが「吸っている人にはなるべく近づかないようにする」等の自衛手段をあげ、「親(父・両親)にタバコをやめさせ

たい」「歩きタバコはやめてほしい」、「受動喫煙しなくて良い環境にしていきたい」等、要望や実践目標をあげる者もいた。

「今後、禁煙支援などの活動があれば、参加したいですか?」という質問に対しては、「出来れば(時間があれば・機会があれば)参加したい」という者が多かったが、「わからない」「あまり興味がない」「したくはない」「禁煙に成功したら…」という意見もあった。

「他にになにかご意見があれば書いてください。」に対しては「ACのCMも、外国のようなタバコのCMにしてほしいなと思います」、「タバコの箱に外国のように画像を載せてほしいと思います」、「タバコをなくしてほしい」、「3年間の間でやめられたらいいなと思います」、「将来歯科医療従事者として私も禁煙支援していきたいです」などという意見があった。

IV 考察

今回用いた『タバコについての質問票』のうち、タバコ・喫煙等に対する意識についての11項目の質問は、加濃式社会的ニコチン依存度調査票(Kano Test for Social Nicotine Dependence: KTSND, Version 2)⁷⁾に医療従事者の在りようを問う質問を加えて作成された。KTSNDは加濃・吉井らによって「喫煙を美化、正当化、合理化し、またその害を否定することにより、文化性を持つ嗜好として社会に根付いた行

為と認知する心理状態」と提唱される社会的ニコチン依存という概念に関して、その依存度を評価する簡易質問票として考案されたものである⁸⁾。

KTSND は喫煙者のみならず、非喫煙者や前喫煙者、また大人から子供まで対象を選ばずに評価できるとされ、多くの報告がある⁹⁻²¹⁾。また、その信頼性については労働者 666 名の調査結果を用いた検討が行われている²²⁾。したがって、KTSND に医療従事者としての意識を追加した今回の質問票は、歯科衛生士学生の医療従事者としての意識を確認するには、適切なものであったと思われる。今回は通常の KTSND の評価のされ方とは異なり、点数化することはせず、禁煙・防煙教育による意識の変化をみるための効果の指標としてのみ用いた。

今回は特別講義の前後で同じ 11 項目の質問を行い、講義前・後におけるタバコ・喫煙等に対する意識の変化を比較検討した (図 3)。

まず「タバコを吸うこと自体が病気である」という意見に賛成の者は 31.7% から 56.7% へ、「医療従事者は、タバコを吸わないのがあたりまえである」という意見については 24.0% から 50.0% へ増加し、講義の前後で有意差 ($P < 0.01$) を認めた。これは基本的な喫煙についての知識を得て、喫煙は治療されるべき疾病であり、将来自分は医療従事者になるのだという認識が高まったためではないかと思われた。また、「タバコは嗜好品である」という意見に賛成の者は 15.4% から 6.7% へ減少し、反対の者は 26.9% から 48.1% へと増加し、講義の前後で有意差 ($P < 0.01$) を認めた。もっと反対意見が増えるであろうと予測したが、「タバコは嗜好品」という刷り込み、間違いではあるが従来慣れ親しんだ認識からの脱却はなかなか容易ではないことが示唆された。しかし「灰皿が置かれている場所は、喫煙できる場所である」という意見に賛成の者は 43.3% から 22.1% へ減少し、反対の者は 7.7% から 26.9% へと増加し講義の前後で有意差 ($P < 0.01$) を認めた。こ

れは従来から問題視されてきた²³⁾「喫煙行動に無関心な非喫煙者」であったと思われる学生たちが、受動喫煙の危険等を認識し、防煙の意識に目覚めたためであろうと考えられた。

さらに現喫煙者がいるにもかかわらず、「喫煙する生活様式も尊重されてよい」、「喫煙によって人生が豊かになる人もいる」という意見に賛成の者は、それぞれ 2.9% と 4.8% から共に 0% となり、反対の者が 41.3% と 34.6% からそれぞれ 76.9% と 76.0% へと増加して講義の前後で有意差 ($P < 0.01$) を認めた。これは、現喫煙者においてさえ、「喫煙」が一般に認めうる生活様式ではなく、「依存」であることを理解したためであろうと思われた。

「タバコにはストレスを解消する作用がある」という意見に賛成の者は 19.2% から 3.8% へ減少し、「タバコは喫煙者の頭の働きを高める」、「医者にはタバコの害を騒ぎすぎる」という意見に賛成の者は共に 1.9% から 1.0% へ減少し、講義の前後で有意差 ($P < 0.01$) を認めた。しかし、「タバコには効用がある」という意見に賛成の者は、1.0% から 1.9% へ増加し、講義前の結果と比較して有意差は認められなかった。現喫煙者のように喫煙が生活習慣として定着している場合などには、以前からの認識を改めるのは困難なものと思われた。

なお、「喫煙には文化がある」という意見では反対が 32.7% から 46.2% へと増加したが、賛成の者も 7.7% から 9.6% へと増加しており、講義前の結果と比較して有意差は認められなかった。この結果より、喫煙が加濃らのいう“文化性を持つ嗜好”である⁸⁾という認識でいかに根深く一般に定着しているかがうかがえた。

「あなたはタバコを吸いますか?」という質問で喫煙率を見たところ、常習喫煙・非常習喫煙を合わせて 5.8% の喫煙率であった。これは湘南短期大学における歯科衛生学科 2 年生 117 名の喫煙率 17.1%²⁴⁾ および鶴見大学短期大学部歯科衛生科 2 年生 154 名の喫煙率 14.3%²⁵⁾ と比較しても、1 年生と 2 年生の違いがあり、調査

時期が5~7年遅いとはいえ低かった。現喫煙者6名中、毎日吸うと回答した3名は禁煙の継続ができなかったことに対して自由記載で回答しており、理由として、身体的には「いらいら」など、離脱症状を挙げていた。また、環境的には周りに喫煙者が多い「吸う人ばかり」な状況が考えられた。女性や若年者は依存の形成が早い⁴⁾といわれており、このような状況下で彼女らが自らの力のみで禁煙に成功していくのは難しいものと思われた。アンケートを取った時点で禁煙に興味がない者はいなかったが、具体的な禁煙準備、いわゆる禁煙に至る行動連鎖²⁶⁾を望めるような状態の者はほとんどいなかった。

自由記載による調査の結果、学生たちの多くは、タバコは危険なもので、禁煙治療の導入は良いことだと認識しており、歯科医療従事者が禁煙支援にかかわる必要性を認めていた。今回と同じ内容の本を読んだり講演を聴いたことがあると回答した者は26.9%に過ぎなかったことから、こういった認識を持ったのは今回の特別講義の効果であろうと思われた。また、家族・同居者の喫煙のある者が57.7%、その他バイト先の人や友達などを入れると、学生たちのまわりのタバコにまつわる環境は良くない者が多かった。女性は男性よりも依存が形成されやすく、自分が依存状態にあることに気づかず、将来の妊娠出産授乳の際にも禁煙できにくい²⁷⁾といわれている。妊娠する性を持つ女性である学生たちの多くが受動喫煙にさらされていることは、非常に問題であると思われた。自分自身や身の回りの改善したいこととして、タバコ煙をさけるなどの自衛手段や親(父親など)に禁煙してほしい、歩きたばこ禁止等の受動喫煙を避けるための要望をあげたことは、学生たちのタバコに対する認識の変容をうかがわせた。

禁煙支援などの活動については出来れば参加したい者からしたくない者まで様々で、まだまだ知識不足のため自信がないものと思われた。

他の意見としてはオーストラリアの quit line

のCMのようなCMを希望する者や、タバコの箱への写真による警告表示を望む者、タバコ販売の禁止を望む者などがおり、公共的な手段の必要性が示唆された。一方、自分が禁煙したい、あるいは禁煙支援をしていきたいという希望をあげる者もおり、まずは学生たち本人への禁煙支援、ついで学生たちが将来禁煙支援を行えるための教育の必要性が示唆された。

V まとめ

タバコ・喫煙に関する特別講義を行い、講義前および講義後におけるタバコ・喫煙に対する意識の変化を見たところ、講義後には11項目中9項目でタバコ・喫煙に対する意識は改善されていた。しかし、タバコには効用がある、喫煙には文化があるという認識については改善されていなかった。

家族・同居者の喫煙率は57.7%、本人の喫煙率は5.8%で、禁煙に関心がない者はいなかった。

自由記載から、学生を取り巻く喫煙に関する状況は決して良くはなく、学生たちの多くはタバコは危険なもので禁煙治療の導入は良いことだと認識しており、歯科医療従事者が禁煙支援にかかわる必要性を認めていた。

謝辞

本調査は平成23年度関西女子短期大学奨励研究費の助成によるものです。ここに心から感謝の意を表します。また、調査にご協力いただいた歯科衛生学科の学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) たばこ規制枠組条約(FCTC); 外務省: <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/who/fctc.html> (2012. 5. 8アクセス)
- 2) FCTC 受動喫煙防止条約ガイドライン日本禁煙学会: http://www.nosmoke55.jp/data/0707_cop2.html (2012. 5. 8アクセス)
- 3) 世界禁煙デー「たばこ産業の干渉を阻止しよう」; WHO|WHO 神戸センター: http://www.who.int/kobe_centre/ja/ (2012. 5. 8アクセス)

- 4) 三條典男：若年女性と喫煙 禁煙指導 妊娠する性としての女性、日本禁煙学会雑誌、5(3)、94-98、2010.
- 5) 内閣府：平成20年度 青少年有害環境対策推進事業(青少年の酒類・たばこを取得・使用させない取り組みに関する意識調査)報告書.
- 6) 山岡雅顕：第3回禁煙治療セミナー講演録 総論：未成年喫煙の過去、現在、未来～2010年度未成年者喫煙ゼロ目標は達成できるのか?～、日本禁煙学会雑誌、6(3)、48-51、2011.
- 7) 加濃式社会的ニコチン依存度質問票；加濃式社会的ニコチン依存度：http://homepage3.nifty.com/tobaccoby0/KTSND.html(2012.5.8アクセス)
- 8) 吉井千春、加濃正人、相沢政明、ほか：加濃式社会的ニコチン依存度調査票の試用(製薬会社編)、日本禁煙医師連盟通信、13、6-11、2004.
- 9) 北田雅子、武蔵 学、谷口春子、他：加濃式社会的ニコチン依存度調査票 Version 2を用いた防煙教育の可能性についての検討、日本禁煙医師連盟通信、15、9-11、2006.
- 10) 栗岡成人、稲垣幸司、吉井千春、加濃正人：加濃式社会的ニコチン依存度調査票による女子学生のタバコに対する意識調査(2006年度)、日本禁煙学会雑誌、2(5)、2007.
- 11) 栗岡成人、吉井千春、加濃正人：女子学生のタバコに対する意識-加濃式社会的ニコチン依存度調査票 Version 2による解析-、京都医学会雑誌、54(1)、181-185、2007.
- 12) 星野啓一、吉井千春、中久木一乗、大国義弘、田那村雅子、紅谷 歩、丸山恵梨子、加濃正人、大谷美津子：加濃式社会的ニコチン依存度調査票を用いた小学校高学年および中学生における喫煙防止教育の評価-千葉県健康福祉部企画「喫煙防止出前健康教室」における調査-、日本禁煙学会雑誌、2(7)、2007.
- 13) 遠藤 明、加濃正人、吉井千春、相沢政明、国友史雄、磯村 毅、稲垣幸司、天貝賢二：高校生の喫煙に対する認識と禁煙教育の効果、日本禁煙学会雑誌、3(1)、2008.
- 14) 吉井千春、栗岡成人、加濃正人、天貝賢二、稲垣幸司、瀬在 泉、北田雅子、大谷哲也、原田正平、田中善紹：加濃式社会的ニコチン依存度調査票(KTSND)を用いた「みやこ禁煙学会」参加者の喫煙に関する意識調査、日本禁煙学会雑誌、3(2)、2008.
- 15) 遠藤 明、加濃正人、吉井千春、相沢政明、国友史雄、磯村 毅、稲垣幸司、天貝賢二：中学生の喫煙に対する認識と禁煙教育の効果、日本禁煙学会雑誌、3(3)、2008.
- 16) 栗岡成人、廣田郁美、吉井千春、稲垣幸司、瀬在 泉、加濃正人：禁煙治療1年後の禁煙率とタバコに対する認知の変化：-加濃式社会的ニコチン依存度調査票(KTSND)による評価-、日本禁煙学会雑誌、4(1)、2009.
- 17) 栗岡成人、北田雅子、吉井千春、稲垣幸司、瀬在 泉、加濃正人：女子学生のタバコに対する意識と生活習慣は関係があるか?-加濃式社会的ニコチン依存度調査票による分析-、日本禁煙学会雑誌、4(2)、2009.
- 18) 瀬在 泉、稲垣幸司、小出龍郎、吉井千春、加納正人、栗岡成人、遠藤 明、大谷哲也、宗像恒次：中期以降における喫煙状況と喫煙に関する意識及び主観的ストレス源認知との関連、日本禁煙学会雑誌、4(3)、91-99、2009.
- 19) 稲垣幸司、斎藤友治、向井正視、松井幸雄、岩田昌彦、羽根寿美、野口俊英、張山誠司、西尾公司、渡邊 淳、佐々木琢磨、大池洋治、花村 肇、大竹和美、小出龍郎：歯科医療系学部と薬学部学生の喫煙状況と社会的ニコチン依存度、日本禁煙学会雑誌、4(3)、78-90、2009.
- 20) 齋藤百枝美、渡邊真知子、渡部多真紀、渡辺茂和、土屋雅勇：喫煙に対する薬学生の意識調査、日本禁煙学会雑誌、5(6)、158-164、2010.
- 21) 北田雅子、天貝賢二、大浦麻絵、谷口治子、加濃正人：喫煙未経験者の「加濃式社会的ニコチン依存度(KTSND)」ならびに喫煙規制に対する意識が将来の喫煙行動に与える影響-大学生を対象とした追跡調査より-、日本禁煙学会雑誌、6(6)、98-107、2011.
- 22) Otani T, Yoshii C, Kano M, et al: Validity and Reliability of Kano Test for social Nicotine Dependence (KTSND). Ann Epidemiol 2009; 19; May 18. Epub ahead of print.
- 23) 稲垣幸司、野口俊英、大橋真弓、細井延行、森田一三、中垣晴男、埴岡 隆、栗岡成人、遠藤 明、大谷哲也、磯村 毅、吉井千春、加濃正人：妊婦の口腔衛生、喫煙および受動喫煙に対する意識と社会的ニコチン依存度、日本禁煙学会雑誌、3(6)、2008.
- 24) 中向井政子、石田直子：学生の喫煙率と禁煙教育(第1報)、湘南短期大学紀要、18、87-91、2007.

細見 環・中山真理・島中能子：歯科衛生学科 1 年次生における喫煙に関する特別講義後における意識の変化について(第 1 報)

- 25) 吉田美智子、玉木裕子：本学歯科衛生科学生
の喫煙状況について－1995 年度と 2004 年度に
おける質問紙調査成績との比較－、保健つるみ、
29、7-11、2006.
- 26) 足達淑子：禁煙支援の心理的アプローチ－行
動療法の実際と女性における課題－、日本禁煙
学会雑誌、5(6)、179-185、2010.
- 27) 鈴木史明、笠松隆洋：妊婦における喫煙状況
とタバコの害の認知状況との関連、日本禁煙学
会雑誌、4(5)、119-124、2009.